様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２１９１

研究課題名（和文）天使の存在論から天使の倫理学へ：天使論に対する哲学的・倫理学的研究の基礎づけ

研究課題名（英文）From Ontology of Angels to Ethics of Angels: Foundations of Philosophical and Ethical Studies on Angelology

研究代表者
石田　隆太（ISHIDA, Ryuta）

慶應義塾大学・文学部（三田）・訪問研究員

研究者番号：１０８１４５８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：13世紀後半から14世紀前半の天使論を理論的に整備するための作業として、(1)ボナヴェントゥラとトマス・アクィナスという二人のスコラ学者に関して、天使の種が一つか複数かという議論を哲学史的な観点から分析した。より個別的には、(2)トマス・アクィナスの天使論に焦点を当てて、種が個であるという種の個体説を以上の(1)から得た知見の下に再検討した。（3）ボナヴェントゥラの質料形相論に注目することで、天使論に自然学的なアプローチを用いる彼の議論を再構成し研究発表を行った。
以上と並行して、ドゥンス・スコトゥスの天使論に関する一次文献の翻訳を公刊した（本邦初訳）。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学術的意義としては、中世ヨーロッパの天使論を哲学・倫理学研究の俎上に載せるために基礎的な整備を行ったことが挙げられる。これにより、天使論を単なる宗教的な言説として見る以外の可能性を開くことができる。
社会的意義としては、西洋中世哲学のなかでも宗教性が強いように見える天使論を哲学・倫理学研究の枠内で提示することにより、哲学・倫理学が一般的に幅広い射程をもつことを西洋中世哲学研究の視点から示すことができる。

研究成果の概要（英文）：For philosophical and ethical explanation of angelology in the late 13th and early 14th centuries, I analyzed the debate on whether there is one or more species of angels in two scholastics, Bonaventure and Thomas Aquinas. More specifically, focusing on Thomas Aquinas's angelology, I reexamined the theory of the angelic species, of each species is individuated by its own essence. By focusing on Bonaventure's hylomorphism, I reconstructed his argument on angelic essential composition from a naturalistic approach.
In parallel with the above, I published a translation of some part of Duns Scotus's Ordinatio which deals with angelology. This is the first translation in Japanese.

研究分野：西洋中世哲学

キーワード：天使　種（species）　個

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

哲学のあらゆる問いは、人間とは何かという問いに帰着する。この根源的な問いに答えるためには、文字通り人間について考えるしかないのだろうか。すなわち、人間以外のものについて考えることで人間とは何かという問いに応答する可能性はないのだろうか。この有力な可能性の一つを与えてくれるのが、西洋中世を中心に展開されたスコラ学である。スコラ学者たちは、大半がキリスト教の神学者でもあるがゆえに、人間のみならず神や天使という超自然的な存在について高度に専門的な思索を展開した。具体的には、人間のみならず神や天使についても共通に論じられた主要な問題は次の通りである。

① 身体性（あるいは**質料性**）からどれほど離れて存在できるのか。

② どれほどの**知性**的な能力を持つのか。

③ **自由**意志はどのように機能するのか。

④ （人間であれば**人格**を意味する）**ペルソナ**をどのように所有しているのか。

まず神に関して、ほとんどのスコラ学者たちは同じように応答する。①については身体性および質料性を全くもって認めず、②については最大度の知性的な能力を認め、③についても最大度の自由を認める。④については、父・子・聖霊というそれぞれのペルソナによる三位一体の教義を護持する。これらの応答を介して人間とは何かを考えることは可能ではあるが、むしろ明らかになるのは、人間がそのような神とは全く異なるということである。

それに対して、天使に関しては、スコラ学者たちの見解はそれほど一致していない。特に①については、まず天使の質料性（ただし霊的な意味という特殊な質料性）を保持する立場があり、これは 13 世紀後半に活躍したスコラ学者**ボナヴェントゥラ**に代表される。次に天使の**非質料性**を保持する立場があり、同じ時代に活躍したスコラ学者**トマス・アクィナス**に代表される。ボナヴェントゥラとトマスは、西洋 13 世紀後半において天使論の主要な流派を形成した二大人物である。この二人の天使論を同時に受容しながらも、彼らとは異なる独自の思想体系を構築したのが**ドゥンス・スコトゥス**であった。したがって、たとえ同じ宗教的な背景を共有しているスコラ学者たちの間であっても、天使論においてはむしろ哲学的な思考を各人が先鋭化させている。その先鋭化された思考こそ哲学および倫理学の研究に役立つものであり、その思考がどの点で先鋭化されているのかを見極めることは人間とは何かという根源的な問いに答える機会を与えてくれる。

２．研究の目的

本研究は、スコラ学者たちの天使論を、哲学的および倫理学的観点から或る一つの体系として整備し直すことを目指す。具体的には、西洋中世に活躍した三人の代表的なスコラ学者であるボナヴェントゥラ、トマス・アクィナス、ドゥンス・スコトゥスに焦点を定めた上で、前述の①～④に即して天使論の諸問題を整理する。

３．研究の方法

一次文献（すべてラテン語）の精確な読解と関連する二次文献の批判的検討を行う。使用する校訂版については、まずボナヴェントゥラに関しては**クァラッキ版**を使用する。次に、トマス・アクィナスに関しては**レオ版**を基本的に使用し、レオ版に収録されていないものに関しては ***Corpus Thomisticum***（http://www.corpusthomisticum.org/）を活用することで全著作を対象とする。最後に、スコトゥスに関しては**ヴァチカン版**を基本的に使用し、ヴァチカン版に収録されていないが本研究に不可欠な著作の内、『パリ講義録』に関しては**ヴィヴェス版**を使用し、それでも不足の場合は必要に応じて現存する写本を参照する。

４．研究成果

2018 年度

（1）13 世紀後半の天使論を理論的に整備するための作業として、①ボナヴェントゥラ、トマス・アクィナスという二人のスコラ学者に関して、天使の種が一つか複数かという議論を哲学史的な観点から分析した。この分析は主に二つの観点から実施された。一つは、個体化という哲学史的に重要な概念に注目した上で、両者のスコラ的な議論を哲学的な仕方で再構成することである。もう一つは、天使の種に関して論じている両者のテクストを詳細に読解しながら、当時のスコラ学者自身が前提としていた枠組みを整理することである。この二つの作業により、第一に、天使の種に関する両者の存在論的な前提を抽出することができた。第二に、こうした哲学的な議論を当時の歴史的な文脈の中に位置づけることができた。①がより大きな見取り図を得ることを目的としていたのに対して、より個別的には、②トマス・アクィナスの天使論に焦点を当てて、種が個であるという種の個体説を以上の①から得た知見の下に再検討した。③天使論の近世における展開を見定めるために、西洋近世のスコラ学者フランシスコ・スアレスの天使論に焦点を当てて、天使の種に関する彼の思想的立場を分析するとともに、以上の①から得た知見と突き合せる作業を行った。

（2）翻訳研究としては、①ドゥンス・スコトゥス著『オルディナティオ』第二巻第三区分第一部第七問題の翻訳研究と、②トマス・アクィナス著『「魂について」註解』第三巻第一章および第二章の翻訳研究を進め、大学紀要にその成果を発表した。これは本邦初訳である。

2019 年度

（1）前年度に引き続き 13 世紀後半の天使論を理論的に整備するという目的の下に、①トマス・アクィナスの天使論と天体論に同時に注目することで、天使論と密接に関わる仕方で彼における種（species）の理論を再構成し論文にまとめた。②ペトルス・ヨハニス・オリヴィの個体論に注目することで、天使を含むあらゆる個体がどのような哲学的

理論の下に捉えられているのかを再構成し学会発表を行った。③13 世紀の天使論をより客観的に見るための一つの視座を提供するために、西洋近世のスコラ学者フランシスコ・スアレスの天使論に注目して、天使の種に関する彼の思想的立場を分析し論文にまとめた。

（2）翻訳研究としては、①ドゥンス・スコトゥス著『「命題集」講義録』（レクトゥラ）第二巻第三区分第一部第二問題～第三問題、②トマス・アクィナス著『「魂について」註解』第三巻第三章～第五章、③ペトルス・ヨハニス・オリヴィ著『哲学者たちの著書を読み通すことについて』、④ジョン・ペッカム著『世界の永遠性に関する問題集』第一問題の翻訳研究を進め、大学紀要にそれらの成果を発表した。これらはすべて本邦初訳である。②は直接的には人間の魂に関するテクストであるものの、同様に知性実体とされる天使に関しても有益な記述に富んでいる。③は中世の修道士たちが哲学を学ぶ意義について論じた小著であるが、天使論という分野がどのようなものとして捉えられていたのかという点について一定の視座を与える可能性を有している。④は世界の永遠性を主張する人々に対する論駁書であるが、永遠という観念に対する一定の理解を与えてくれる。これは、永劫という特殊な時間軸に生きるとされる天使の時間論について考える際に重要である。

2020 年度

（1）14 世紀前半の天使論における変容を検証するという目的の前提になることとして、①トマス・アクィナスの悪論に注目することで、天使の堕落した存在である悪霊・悪魔に関する彼の理論的な説明の前提となる存在論的な悪と道徳的な悪の区別について再構成し研究発表を行った。②ボナヴェントゥラの質料形相論に注目することで、天使論に自然学的なアプローチを用いる彼の議論を再構成し研究発表を行った。③ペトルス・ヨハニス・オリヴィの個体論に注目することで、汎神論的な天使論を警戒するオリヴィの思想に関する言及を含む論文を公刊した。④新プラトン主義と西洋中世の天使論との関わりを見るために、六世紀の新プラトン主義者シンプリキオスをトマス・アクィナスがどのように受容しているかについて明らかにし研究発表を行った。

（2）翻訳研究としては、①ドゥンス・スコトゥス著『「命題集」講義録』（レクトゥラ）第二巻第三区分第一部第四問題、②トマス・アクィナス著『「魂について」註解』第三巻第六章、③トマス・アクィナス著『諸元素の混合について』、④サットンのトマス『第一任意討論集』第二十一問題、⑤ピエトロ・ポンポナッツィ『魂の不死性について』（第四巻まで）の翻訳研究を進め、大学紀要にそれらの成果を発表した。これらは基本的に本邦初訳である。③は直接的には物体の構成に関するテクストであるものの、質料形相論全般に関する有益な記述に富んでいる。⑤は人間の魂に関するテクストだが、知性認識という作用を共有するかぎりで天使論とも密接な関連をもつ。

2021 年度

（1）13 世紀後半から 14 世紀前半の天使論に関する体系的なモデルを完成させるため

に、①西洋中世の天使論を代表するトマス・アクィナスのモデルを、井筒俊彦およびアンリ・コルバンにおける天使論のモデルと比較する論文を公刊し、それに関わる研究発表も行った。②さらにトマスの個体論を神の三位一体に関する思想のなかに見出すことで、天使論にも共通する存在論の体系を確認する論文を公刊した。③さらにトマスが想定する悪の存在論の基本的な骨格を明確化することで、天使とは対極に位置する悪魔にもつながる悪の思想を概観する論文を公刊した。④西洋中世哲学の影響を近世日本におけるキリシタンの世紀のなかに見出すことで、霊的な存在者について語る思想的な源泉の一つである偽アウグスティヌス『霊と魂について』の影響力を新たに確認する論文を公刊した。

（2）翻訳研究としては、①ドゥンス・スコトゥス著『「命題集」講義録』（レクトゥラ）第二巻第三区分第一部第四問題、②トマス・アクィナス著『「魂について」註解』第三巻第七章、③リューベックのヘンリクス『第一任意討論集』第十九問題、④ピエトロ・ポンポナッツィ『魂の不死性について』（第五章から第八章まで）の翻訳研究を進め、大学紀要にそれらの成果を発表した。これらは基本的に本邦初訳である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計25件（うち査読付論文　14件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　23件）

１．著者名 石田隆太	４．巻 706
２．論文標題 天使学の共時的構造化――井筒、コルバン、アクィナス	５．発行年 2021年
３．雑誌名 理想	６．最初と最後の頁 78-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ryuta Ishida	４．巻 40
２．論文標題 Individuality in the Godhead and the Trinity: Thomas Aquinas’s Theory of Individuals	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Veritas: Kyodai Studies in Mediaeval Philosophy（中世哲学研究）	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Ryuta Ishida	４．巻 40
２．論文標題 Pedro Gomez’s Compendium and His Acceptance of Aquinas: A Jesuit Position	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Miscellanea philosophica: The Tetsugaku Shiso Ronso（哲学・思想論叢）	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石田隆太	４．巻 14
２．論文標題 トマス・アクィナスの「悪の研究」――『定期討論集 悪について』第1問題	５．発行年 2022年
３．雑誌名 古典古代学	６．最初と最後の頁 15-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田隆太、本間裕之	4．巻 30
2．論文標題 ドゥンス・スコトゥス『「命題集」講義録』第2巻第3区分第1部第4問題（nn.102-24）　試訳	5．発行年 2022年
3．雑誌名 筑波哲学	6．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 石田隆太	4．巻 62
2．論文標題 ペトルス・ヨハニス・オリヴィと個体化の問題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中世思想研究	6．最初と最後の頁 38-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 石田隆太	4．巻 13
2．論文標題 トマス・アクィナス『諸元素の混合について』―試訳―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 古典古代学	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 石田隆太、本間裕之	4．巻 29
2．論文標題 ドゥンス・スコトゥス『「命題集」講義録』第2巻第3区分第1部第4問題（第101段落まで）　試訳	5．発行年 2021年
3．雑誌名 筑波哲学	6．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1．著者名 石田隆太	4．巻 38
2．論文標題 フランシスコ・スアレスと諸天使の種別化：トマス説に対する或るイエズス会士の立場	5．発行年 2020年
3．雑誌名 哲学・思想論叢	6．最初と最後の頁 41-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田隆太	4．巻 145
2．論文標題 諸天体と諸天使の種別化：トマス・アクィナスと種の理論	5．発行年 2020年
3．雑誌名 哲學（三田哲學會）	6．最初と最後の頁 35-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田隆太、本間裕之	4．巻 28
2．論文標題 ドゥンス・スコトゥス『「命題集」講義録』第2巻第3区分第1部第2問題～第3問題 試訳	5．発行年 2020年
3．雑誌名 筑波哲学	6．最初と最後の頁 75-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石田隆太	4．巻 37
2．論文標題 何が個体化されるのか？――二人のスコラ学者による個体化論とその存在論的前提	5．発行年 2019年
3．雑誌名 哲学・思想論叢	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 本間裕之、石田隆太	4．巻 27
2．論文標題 ドゥンス・スコトゥス『「命題集」註解（オルディナティオ）』第2巻第3区分第1部第7問題 試訳	5．発行年 2019年
3．雑誌名 筑波哲学	6．最初と最後の頁 104-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 石田隆太
2．発表標題 「天使の哲学」再考：西洋中世哲学の可能性
3．学会等名 桜美林哲学セミナー 2021年度研究発表会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 石田隆太
2．発表標題 トマス・アクィナスの「悪の研究」――『定期討論集 悪について』第1問題
3．学会等名 哲学オンラインセミナー（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 石田隆太
2．発表標題 霊的質料とは何だったのか：ボナヴェントゥラの質料形相論
3．学会等名 中世哲学会第69回大会
4．発表年 2020年

１．発表者名 石田隆太
２．発表標題 ペトルス・ヨハニス・オリヴィと個体化の問題
３．学会等名 中世哲学会第68回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 石田隆太
２．発表標題 諸天体と諸天使の種別化：トマス・アクィナスと種の理論
３．学会等名 2018年度MIPS（三田哲学会哲学・倫理学部門）例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 石田隆太
２．発表標題 諸天使の種別化とフランシスコ・スアレス
３．学会等名 筑波大学哲学・思想学会第39回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 石田隆太
２．発表標題 天体からのアナロジー：天使の種に関する議論について
３．学会等名 西洋中世学会第10回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 石田隆太
２．発表標題 個体の数量化と抽象化：リューベックのヘンリクスによる個体化論から出発して
３．学会等名 日本哲学会第77回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://researchmap.jp/r_ishida

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関